

邵晋涵の集部提要稿について

菅原博子

一

清朝乾隆期における大規模な国家的事業である四庫全書纂修は、『永樂大典』中に散見される遺書の輯集を一つの大きな柱とする。その仕事に従事するべく「校勘永樂大典纂修兼分校官」に任じられた学者三十九人の一人、邵晋涵⁽¹⁾は、その家集『南江文鈔』に収める提要の分纂稿三十七篇がある。そのほとんどは、史部正史類に著録される書物の提要稿であるが、⁽²⁾経部の提要稿四篇、集部の提要稿四篇もあわせ含んでいる。

集部提要稿四篇のうち、以下に示す如く、三篇は著録の、一篇は存目のそれである。この著録される三篇の提要稿を、総目提要と比較してみると、「盤洲集提要」と「臨安集提要」は、その表現の異同を明らかに対比させることができる。しかし「性情集提要」については、単純に対校できるほどには似ていないと言える。そこで、ここでは「性情集提要」を取りあげ、総目提要との異同を検討し、邵晋涵の集部の書に対する考え方、あるいは詩文についての考え方を探る一助としたい。

盤洲集提要 総目提要は別集類十三 浙江巡撫採進本(『四庫採進書目』浙江省第四次鮑士恭呈送書目)には「盤洲文集八十卷 十本」とある)

性情集提要 総目提要は別集類二十一 永楽大典本 いま『景印四庫全書珍本』初集について文淵閣本を見ることが出来る。

臨安集提要 総目提要は別集類二十二 永楽大典本 いま『景印四庫全書珍本』第三集について文淵閣本を見ることが出来る。

勉齋遺集提要 総目提要は別集類存目三（『勉齋遺藁』に作る）浙江巡撫採進本

二

提要は、まず著者の履歴、ついで著録した書の内容、校定の際気づいたこと、及びその批評などを記すのが体例である。邵晋涵の提要稿も一応はその体例にかなっていると言える。しかし総目提要と比べてみると、その表現が、結局は同じ事実を述べるのであっても、その姿勢・態度はずいぶんと違うように思われる。以下、「性情集提要」を検討しつつ、考えてみたい。（便宜的に邵晋涵の提要稿を「邵稿」、総目提要を「総目」と略称することにす。）

〔邵稿〕性情集六卷。元周巽撰。巽字巽泉。廬陵人。元末隨湖廣平章鞏卜班征叛獠。以功授永明簿。明初不仕。

（性情集六卷。元の周巽の撰である。巽は字は巽泉、廬陵の人である。元末に湖広の平章事鞏卜が軍隊を出して叛旗をひるがえした獠族を征伐するのに従い、功績あるによって永明の簿を授けられたが、明初には仕えなかった。）

まずは著者周巽の伝の部分についてである。『性情集』は『永楽大典』からの輯佚によって復原されたのであるから、著者の伝を述べるにあたっては、当然、輯佚された書そのものを拠り所とするほかはない。現におそらく邵晋涵が『性情集』そのものを拠り所としたであろうことは、『景印四庫全書珍本』所収の『性情集』を見てうなずけるのであるが、邵晋涵は、いきなり、名、字、出身をわかっていることとして、記す。邵晋涵ほどの人が、あまりにも唐突に過ぎない

か、少し軽率ではないか、という思いが、「総目」の筆者にはあったのであろうか。「総目」は、周巽の事蹟は、周巽自身の集の中から拾い出すべきであるという姿勢を明確に示して、「巽の事蹟は他書に見えず」と言い、その集が『文淵閣書目』にのみ載っていること、その標題が『永樂大典』と同じであること、また『吉安府志』に周巽亨の詩として載せられている「白鷺洲」「洗耳亭」二詩が、『性情集』と一致すること、集中の「擬古樂府小序」の自署などをいちいち証拠として挙げて、著者の名・字・号を認定する。また集中の詩題から元朝の官吏であったと言い、自署している干支から判断して明初には存命であったと言う。

〔総目〕元周巽撰。巽事蹟不見於他書。其詩集諸家亦未著錄。惟文淵閣書目。載有周巽泉性情集一部一冊。與永樂大典標題同。吉安府志。又載有周巽亨白鷺洲洗耳亭二詩。檢勘亦與此集相合。而集中擬古樂府小序。則自題曰龍唐耄艾周巽云云。以諸條參互考之。知巽爲其名。而巽泉巽亨。乃其號與字也。集中自稱嘗從征道賀二縣獠寇。以功授永明簿。則在元曾登仕版。而所紀干支。有丙辰九月。當爲洪武九年。則明初尙存矣。

明の太祖朱元璋は、文人に対して、特に古い型の知識人と思われる者に対しては、彼らが、文弱・煩瑣・虚飾という弊害にしばしば陥りがちであった従来の文明の担い手であるということで、非常に苛酷な政治をおこなったと言う（吉川幸次郎『元明詩概説』筑摩書房『全集』第十五巻）。「総目」に、「明初に尙ほ存す」と述べるのは、太祖の肅清の対象になるような文人ではなかったということであろうか。「邵稿」は「明初に仕へず」と言う。あくまでも元朝の官吏として節を持したということなのであろうか。あるいは太祖の求める新しい型の知識人、文学の能力を重要視されない新しい階層の人では到底ありえなかったということであろうか。周巽の人となりについて、「邵稿」と「総目」と大きく異なるところである。

次は、周巽の詩について論ずるくだりである。

〔邵稿〕異詩詞清拔。不沿元人纖靡之習。首列擬古樂府二卷。能陶鑄古意而不襲其辭。頗與劉文成相近。有明一代之詩。好摹擬漢魏。而厭薄兩宋。其風氣已仿乎此矣。詩中多與蘇天爵虞集諸人互相唱酬。其師友講貫之功。有可考見者。惟前後咏梅詩。太多排比牽合。不免於潦倒粗率之病。要取其精至者而論之。固亦元末之作家也。(異の詩詞は、俗気がなく清らで秀でており、元代の詩人たちがしばしば陥りやすい繊細なあでやかさといった習癖に因循しない。集の初めには、「擬古樂府」二巻を並べている。よく古の意を融合させていて、その言葉を踏襲はしていない。いささか劉文成と近い。明一代の詩は、好んで漢魏を模擬し、兩宋を軽んずるが、その氣運はすでにここに始まる。詩の中には、蘇天爵や虞集といった人々と唱酬しているものが多く、その師友とともに研鑽を積む点は、考見すべきものがある。思うに、「卷五と卷六に」前後〔して収められている〕詠梅詩は、言葉合わせにすぎない対句が多かったり、むりに題にあてはめようとするばかりで、おおざっぱで輕率であるという欠点は免れない。が、その詩心の表われたものを取りあげて論ずれば、もとより彼もまた元末の詩人である。)

〔総目〕異詩格不高。頗乏沈鬱頓挫之致。然其抒懷寫景。亦頗近自然。要自不失雅則。集以性情爲名。其所尙蓋可知也。

「総目」では、周異の詩の風格を高くないと一言断言する。だから沈鬱頓挫の趣に乏しいと。しかし、抒情や写景の詩について、自然に近いと認める。詩の本道からそれていないということから、『性情集』と名付けたことを評価するだけである。

「沈鬱頓挫」(挫は坐に通ず)とは、杜甫「進鵬賦表」(『杜工部集』卷一九)に「沈鬱にして頓坐し、隨時に敏捷なるに至りては、揚雄枚臯の流に、跋及すべきことを庶ふ也。」とあるのによる語で、その著述の筆勢が重々しくて抑揚に富んでいることを表わす。劉文成つまり明の劉基、字は伯温は、宋濂と並ぶ明初の大家であり、太祖の謀臣としても活躍

した人である。『誠意伯文集』二十巻が著録されているが、その提要（別集類二十二）では、劉基の詩を「沈鬱頓挫」と評する。「邵稿」では「頗る劉文成と相近し」とその詩風の類似を認めているが、「総目」の筆者はそうは認めがたく「頗る沈鬱頓挫の致に乏し」と言ったのであろう。明らかに「邵稿」を念頭に置いた上での否定と思われる。これは、前節「総目」に明初に存命であったと述べることに大きく関わる評価である。

「邵稿」では、周巽の詩の言葉は清抜であるから、元代の詩人たちがしばしば陥った弊に因循しないと云う。元詩の特徴は、あえて簡述すれば、それまでの理に勝ちすぎた嫌いのある宋詩の影響を排除して、唐詩、それもとりわけ晩唐詩を学び、模倣するところにある。邵晋涵は、明代に顯著となる漢魏あるいは秦漢にまで溯って模倣するその端緒を周巽の詩に認めたのではなからうか。ただ単に模倣だけをするのではなく、古人の、あふれる思いが詩となって自然に表われる、そういう心を十分に汲みとり育んだ詩人として周巽をみようとしたのではないだろうか。しかし、集の中の前後に見られる詠梅と題する詩について、邵晋涵は、周巽のあふれる思いを感じ取ることはできず、またそこで使用されている詩詞を清抜であるとも思えず、単に言葉遊びにすぎない詩と考えたのではなからうか。周巽の詠梅詩は出来の悪い作品であるが、それらを除外して考えれば、元末の詩人として忘れてはならない一人であるということになる。

末節は、集が長い間失われていたこと、『永樂大典』から輯佚されたことを述べる。

〔邵稿〕集久失傳。今從永樂大典按韻採輯。猶可見其崖略云。（彼の詩集は長いこと伝わっていなかったが、いま、『永樂大典』について韻ごとに拾い集めた。それでもなおその大略を見ることはできよう。）

〔総目〕元末吉州一郡。如周霆震楊允孚郭鈺等。皆有詩集流傳。而巽詩獨佚。殆亦有幸不幸歟。今據永樂大典所載。蒐羅編輯。釐爲六卷。俾與石初諸集。竝存於世。亦未嘗不分路爭馳矣。

「邵稿」では、『永樂大典』より輯佚されたことによって、周巽の集の大略がわかるようになったと、四庫全書に著録

する意義づけをおこなう。それに対して「総目」は、周巽とほぼ同時期であり出身まで同じである詩人たちの集、周震の『石初集』・楊允孚の『灤京雜詠』・郭鈺の『静思集』などは、失われなかったから伝わったままで、単に偶然にすぎないから、ここでそれらの集と一緒に著録だけはしておこうと、非常に冷淡とも思えるような扱い方をする。

「邵稿」と「総目」とを、以上のように対比させてみると、周巽という元末の詩人について、また『性情集』について、両者の評価は大きく異なり、「総目」が、「邵稿」を十分に意識して、「邵稿」に対して一つ一つ論駁を加えるかのように書かれていると言えよう。この両者の評価の相違は、どこからくるのか。おそらく、両者の、文学に対する意識の本質的なちがいにともづくのではなからうか。

三

邵晋涵は、詩文に対してどのような考え方を保持していたのであろうか。『南江文鈔』に収める序を、少し見ていくことにする。

まず「宝巖堂詩鈔序」には、

邵卿子曰はく、詩者中声の止まる所なりと。情は中より動き、之を宣して声と為す。

という。『宝巖堂詩鈔』は、孫永清、字は宏度、号は絜斎の集である。永清の息子爾準は、邵晋涵に師事した。道光十一年（辛卯 一八三二）、孫爾準が、ともに『全唐文』編纂に従事した友人胡敬（字は以莊）に、邵晋涵先生の集の校刊を相談し、校勘を依頼していることなど、「刻南江詩文鈔序」に見える。その師弟関係から父の集に序を書いてくれるよう、邵晋涵に頼んだのであろう。ここに引くのはその冒頭部分である。まず『荀子』勸学篇の言葉を挙げる。次に『詩経』大序の「情 中より動きて、言に形はる。」を踏まえる。つまり、偏りのない中正の声が心の中から湧きおこって

詩となるということか。

次に「沈匏尊詩序」には、

古人は性情を語言に寄す。後人は即ち語言以て其の性情に合するを求む。

とある。沈匏尊とは、翁方綱・朱筠について金石考証の学を学んだ沈心醇である（『雪橋詩話』巻九）。この発言は、『日知録』巻二一に見える顧炎武の論「古人の詩、詩有りて後題有り。今人の詩、題有りて後詩有り。詩有りて後題有る者は、其の詩情に本づく。題有りて後詩有る者は、其の詩物に徇ふ。」（詩題、「詩は性情を主として奇巧を貴しとせず。」（古人用韻無過十字）に溯り得ると考えられる。

「槐塘遺集序」では、槐塘先生、すなわち汪沆の詩文についての考え方を敷陳する形ではあるが、学識に裏付けされた性情こそが大切であると述べる。

先生の詩文に於けるや、衆長を兼采し、屑屑として摹擬せず。嘗て謂へらく、文章の体格は、其の年其の遇に視て変ず。其の変ず可からざる者は、性情也。性情を捨てて諸を体格に求むるは、是れ無実の垂為り。学識日々に充つれば、則ち性情日々に以て和粹す。故に善く性情を養ふ者は、又た学に視ると。晉涵過従することの久しきを以て、其の緒論を得ること此の如し。

汪沆は、『宋詩紀事』を著した厲鶚の弟子。邵晋涵は、乾隆四十二年（丁酉 一七七七）に汪沆と『杭州府志』の纂修に参加し、一年あまり一緒に仕事をしたのである。またその縁で、乾隆四十九年に杭州志を続修する際にも協力をしたという。

さらに「霍尊彝遺詩序」には、

余（邵晋涵）嘗て謂へらく、詩の原は天籟に出づ。天懷 独り撃まる有りて、其の詩皆な伝ふ可き有り。惟だ性情の

糅雑するに塵垢を以てする者、縦たどひ身を終ふるまで之を学ぶとも益無し。

と述べている。天性の純粹な美しい心が極まり溢れ出てこそ、円熟した絶妙な味のある詩と言えるのであって、そのためにはやはり俗世間一般の名声を求めるような心は持たずに、学問に日夜励み、学の恩恵に常に浴すように努めるべきであるという、学者としての発言と受け取れる。霍尊彝については未詳。

結局、詩となって心からあふれでる思いは、人間の素直な、純粹な、真摯な思いである、それにはどんな偏りもありようはずはない、偏りのない純粹さ、真摯さは、まさに経史の学に精励することによって養われるものであり、そうして培われた学識に基く性情の発露こそが、真正の詩である、と邵晋涵は考えていたのではなからうか。

邵晋涵の息子、秉華の『南江文鈔』の跋によれば、邵晋涵は、祖父より詩法を受けて、詩を作ればそれは古の聖人のような作詩の態度で、天籟にかなうものであり、また漢魏六朝から唐宋元明に至るまでの大家名家の内奥に博く通じていた。天性の資質は人並みはずれてすぐれており、その詩も学問も互いに効果を反映させて日々充実していった。しかし、邵晋涵自身は、進士となってからは、

経史に研精し、詩人を以て長たつとれば見るを欲せず。登覽の余間、余事を以て詩を成す。
という具合であったという。

邵晋涵にとって、詩を作ることは目的ではなく、詩人として評価されることは望まぬことであった。乾隆八年（癸亥一七四三）に浙江省余姚に生まれ、嘉慶元年（丙辰 一七九六）五十四歳で亡くなった邵晋涵にしてみれば、清朝の學術の核心をなす考証学が最も盛んであった時期に、この世に生を享けた邵晋涵であってみれば、しごくあたり前の自負なのであるが、私はここに大きな影響があるのではないかと考える。

四

邵晋涵のなした業績は、経部と史部において顕著である。

邵晋涵の伝記資料としては、王昶の「翰林院侍講学士邵君墓表」(『春融堂集』巻六〇)、錢大昕の「翰林院侍講学士邵君墓誌銘」(『潜研堂文集』巻四三)、章学誠の「邵与桐別伝」(『章氏遺書』巻一八)、洪亮吉の「邵学士家伝」(『卷施閣文甲集』巻九)などがある。また『清史稿』は巻四八七列伝二六八儒林二、「清史列伝」は巻五九。さらに『国朝先正事略』(巻三五)『国朝漢学師承記』(巻六)『国朝学案小識』(巻八)『文献徵存録』(巻八)『国朝詩人徵略』(巻四三)などがある。⁽³⁾ これらの資料に拠りながら、邵晋涵の業績が、朱筠や錢大昕の影響のもとにあることを考えてみたい。

乾隆三十六年(辛卯 一七七二)、邵晋涵は礼部会試に一番で合格。このときの試験官は、四庫全書について、具体的に輯書の法を上奏したことで知られる朱筠である。同年の合格者に、のち、ともに四庫全書館に推挙されることになる周永年がいる。この年の冬、邵晋涵は、章学誠・洪亮吉・黄景仁らとともに、太平使院(安徽省)に安徽学政として赴任した朱筠をたずね、しばらく滞在する。⁽⁴⁾

邵晋涵の業績の中で唯一刊行されたと言えるものに、『爾雅正義』二十巻がある。著述の完成は乾隆五十年(乙巳 一七八五)で、その刊行は乾隆五十三年である。邵晋涵が『爾雅正義』を著わすことになった端緒は、朱筠にある。章学誠の「邵与桐別伝」によれば、

大興朱先生則曰。經訓之義荒久矣。雅疏尤蕪陋不治。以君之奥博。宜與郭景純氏先後發明。庶幾嘉惠後學。君由是殫思十年。乃得卒業。今所傳爾雅正義是也。(大興の朱筠先生は言う。経籍の訓詁が荒廢して久しい。邢昺の疏はとりわけ蕪雑で整理されていない。君の深く博い学識で、よろしく郭璞の注のあとを承けて明晰な注を作り、後学

に貢献してほしい、と。君はそこで思いをつくすこと十年、やっと仕事を完成させることができた。いま伝わる所の『爾雅正義』がこれである。)

という。朱筠は、邢昺の疏があまりにも浅薄であるのを嘆き、なんとか邵晋涵の該博な知識と学問に対する厳しい態度とによって、学界に大きく貢献する書が作られることを願ったのであろう。邵晋涵は十年もの長い歳月の後にその仕事を卒えたのであるから、おそらく朱筠と出会い、朱筠を慕って交流している早い時期、即ち太平使院に集ったところに、朱筠から語りかけられたものと思われる。しかし残念なことに、朱筠は乾隆四十六年、五十三歳で死去、邵晋涵の成果を実際に見ることはできなかった。

この『爾雅正義』完成に至る経緯、完成後の影響について、『漢学師承記』は、錢大昕の「邵君墓誌銘」に拠って次のように言う。

於書無所不讀。而非法之書不陳於側。嘗謂爾雅乃六藝之津梁。而邢疏淺陋。乃別爲正義。兼采舍人樊光李巡孫炎諸家之注。有未詳者。撫他書補之。今之學者皆舍邢而宗邵矣。(どんな書物でも読まないものはなく、法にかなわぬ書は傍に並べておかなかつた。つねづね、『爾雅』は六芸の手びきであるが、邢昺の疏は見識がひくいと言って、別に『爾雅正義』を作った。鍵けん為舍人・樊光・李巡・孫炎などの諸家の注をあわせ取り入れた。それでもわからぬものについては、他の書物より拾って補った。今の学者はみな邢昺を捨て、邵晋涵をよりどころとするようになった。)

史部における業績としては、まず四庫全書館において『旧五代史』の輯佚にあたったことが挙げられる。先に記した伝記資料のほとんどが、『旧五代史』の輯佚について取り立てて述べているほど大きな仕事である。いま、高宗の第六子である永瑔等による「進旧五代史表」に、乾隆四十年七月と署しているところから考えて、すでに輯佚は完了し、皇

帝の御覽に供する準備が、この時すでに万端整えられたわけである。乾隆三十八年に四庫全書館が開かれ、会試の時の正考官であった劉統勳によって、戴震や周永年とともに推挙され、「校勘永樂大典纂修兼分校官」に任じられてから、わずか三年に満たない短い期間に、精力的におこなわれた仕事である。四庫開館にあたって、高宗が劉向や揚雄のような人材を得てこの仕事を任せたいと思ったために、推薦された(李元度『国朝先正事略』)のであるから、邵晋涵の自負たるや相当のものがあつたであろう。ところが、のち『旧五代史』が武英殿から刊行されるにあたっては、孔繼涵が手を入れ、他の史書と体裁をそろえるために、邵晋涵が読者の便宜を慮ってつけておいた『永樂大典』の巻数や補完に用いた書名及び巻数など、すべて削ってしまい、邵晋涵の稿本の面目は全くなくなってしまったという。(中華書局『旧五代史』巻末に付す「請照殿版各史例刊刻旧五代史奏章」及び章鈺「孔蒞谷校薛居正五代史跋」)

次には、邵晋涵が『宋史』を改修しようという志を抱いたことが挙げられる。邵晋涵は、乾隆四十八年になって、折から病氣療養のため滞在していた章学誠を相手に、学問論を戦わせ、『宋史』の蕪雜で支離滅裂な具合を嘆き、自ら『宋史』の改修をしようという志を抱くに至るのであるが、そのきっかけは、乾隆三十年(乙酉 一七六五)に合格した郷試の副考官を勤めた錢大昕によって作られたのである。このときの郷試の正考官は曹秀先であったが、病氣のため、試験官としての責務を遂行することができず、錢大昕一人がすべてを任せられ、采配をふるった。錢大昕は、邵晋涵の博く深い学識にいたく感動したようである。邵晋涵にとって、この錢大昕との出会いは大きな意味を持つ。

『漢学師承記』によれば、邵晋涵の『宋史』改修の志のきっかけは、錢大が、『宋史』の紀伝について、南渡後の紀事は、東都(北宋)の時代の法則が整っているには及ばないし、寧宗以後の紀事も、「高宗・孝宗・光宗の」三代が(5)ほぼ備わっているには及ばない、単に事蹟が詳細でないばかりか、褒貶もまたその実を失している、と論じたことにある。

竹汀先生閒論宋史紀傳。南渡後不如東都之有法。寧宗以後又不如前三朝之備。微特事迹不詳。即褒貶亦失其實。残念なことに、その志は果たされずに終わるのであるが、錢大昕『十駕齋養新余録』巻中「南宋事略」の項には、邵晋涵は王偁の『東都事略』に継ぐものとして『南宋事略』（邵君墓誌銘）では『南都事略』を撰すとしている）を擬作、邵晋涵没後、その遺稿を索したが見つからないため、生前寄せられていた所のその目だけを記録して後賢を待ちたい旨が記されている。

また「その文に唐宋八家の臭気を含まぬことを自ら誇る江藩が、その敬愛する師友の文を集めて、学者の運命に深い関心を寄せつつ綴りなした」（近藤光男「漢学師承記の文章——清朝漢学のかたち——」研文出版『清朝考証学の研究』五四頁）と言われる『漢学師承記』が、邵晋涵を録するにあたっては、錢大昕の「邵君墓誌銘」を第一の拠り所としている。江藩は、錢大昕を邵晋涵の一番の理解者と考えたのであろう。

汪中が王念孫に送った手紙には、当時一流の学者を挙げて、「經学には則ち程・戴、史学には則ち錢・邵、小学には則ち若膺 及び足下父子」と言う。程は程瑤田、戴は戴震、若膺とは段玉裁のことであり、足下父子とは言うまでもなく、王念孫・王引之である。（手紙は『昭代經師手簡』に収める。）汪中によれば、史学者として錢大昕と邵晋涵はあわせ評価されているのである。

ここに、邵晋涵には朱筠と錢大昕の影響が大きく見られる。とりわけ錢大昕の史論は、書物としての形こそ成さなかったが、邵晋涵に忠実に受け継がれた、としてさしつかえないであろう。では、文学面ではどうであろうか。

五

史学者錢大昕が、文学についてどのような考えを保持していたかに関しては、近藤光男「錢大昕の文学」（前掲書所収）

がある。それによると、錢大昕は、沈德潛によって吳中七子の一人に数えられたが、その詩論は、沈德潛よりもむしろ袁枚に近く、「詩言志」の精神に立脚して、詩はあくまでも人間のやむにやまれぬ心情の発露であるべきと考えており、乾隆嘉慶の頃、学者たちの間で通念となる「詩は余事のみ」という意識を常に抱き、詩人としての名の立つのを好まなかったという。

とすれば、息子秉華が跋で述べるように、邵晋涵が、詩人として評価されることは望まず、常に学者としての自己を保持し続けようとした姿勢は、まさしく錢大昕からの影響を受けてのことである。また、経史の学に励むことによって養った学識を拠り所とする性情の発露、それこそが性情を重んじるということであり、そうすることによって古人の心に迫りうる詩ができあがると考えていたことについても、錢大昕の影響が認められる。

「性情集提要」において、周巽を、古の詩精神を十分に汲みとり育んだ詩人と考え、その集である『性情集』を、その名の示すように、自然の心情の発露と考へて、著録の意義づけをおこなった邵晋涵の心中には、ひそかに、錢大昕から自分へという「師承」が強く意識されていたのではあるまいか。本領である史学面ではもちろんのことであるが、「詩は余事」と明言し、詩人としての名声を求めるようなことはしなかった文学面においてさえも、「師承」の自負があったのではないかと考へる。結局、邵晋涵は、乾隆期の学者の一典型と言るのである。

注

(1) 静嘉堂文庫蔵『南江文鈔』十六卷(目録には「南江文鈔 (邵氏遺書) 一二卷詩鈔四卷札詩四卷首一卷 清道光刊」とある)は、阮元の「南江邵氏遺書序」、陳寿祺の「南江詩文鈔序」、胡敬の「刻南江詩文鈔序」及び章学誠の「邵与桐別伝」を冠し、末尾に邵晋涵の息子邵秉華の跋を載せる。その巻一至十六の目を示せば、次のようである。

卷一至四 応制文、卷五 賦・擬疏・記・序、卷六・七 序、卷八 書・策問・攷・跋・書後・題辭・銘・贊、卷九 伝、卷邵晋涵の集部提要稿について

十 祭文・行状、卷十一 墓誌銘、卷十二 四庫館提要稿本、卷十三至十六 古今体詩

卷十三至十六は所謂る『南江詩鈔』である。邵秉華の跋は、その内容からして、この『南江詩鈔』のために書かれたものと言える。なお、京都大学文学部蔵『南江文鈔』四巻は、静嘉堂文庫蔵の巻一至六及び巻十二を収める。

(2) 福島 正「邵晋涵の歴史学——余姚邵氏の歴史学 その一——」(京都大学文学部中国哲学史研究室『中国思想史研究』第五号——一九八二年度論文集——)は、主に史部提要稿についての論述である。

(3) 邵晋涵の年譜としては、黄雲眉編『邵二雲先生年譜』がある。これは民国二十年に金陵大学の中国文化研究所叢刊として出されたが、いまは『新編中国名人年譜集成』第十七輯所収。

(4) 朱筠と朱筠に兄事・師事する若者との交流について、河田悌一「清代學術の一側面——朱筠、邵晋涵、洪亮吉そして章学誠——」(『東方学』第五十七輯)に詳しい。

(5) 錢大昕自身の言葉としては、『十駕齋養新録』巻七「南渡諸臣伝不備」の項に見える。

(6) ここには取り上げなかったが、「臨安集提要」に、錢幸が経学の面で明の太祖に重んじられたことを言ったあとで、「詩文は其の余技なり」と述べる。これは錢幸についての言及であるが、邵晋涵自身の考えの表明と見てさしつかえないであろう。